https://rodosoken.com/

トヨタ称賛の中での批判書

杉山　直

出版されるトヨタ本

2006年度の営業利益が２兆円を超えたトヨタ。トヨタの2007年の自動車生産台数はGMを超え世界第１位となった。ヘンリー・フォードがT型フォードを発表したのが、1908年であるから、「クルマの歴史百年目の節目にトップ企業交代が実現した」（『日本経済新聞』、2008年１月５日）ことになる。

こうしたトヨタに社会の関心は集中し、トヨタに関する著書が次々と出版されている。筆者がインターネットで書籍を購入している「本やタウン」のホームページで「トヨタ」と検索し、そこから筆者なりに、新車情報など自動車に関わるものを除いて数えてみると、2007年には50冊あった。これには「トヨタ式」や「トヨタ流」というものも含まれているが、それにしてもその数に驚かされる。「トヨタ」と記されていなくても、著書の中で章をさいて、トヨタをとりあげたものもあるであろう。その点を考慮すると、かなりの著書が出版されたことになる。

筆者が数えたものでも、2007年には約毎週１冊のペースで、トヨタに関連した著書が出版されたことになる。そして、多くの著書はトヨタの経営を礼賛し、世界的な超優良企業として讃えるものが多い。しかしながら、2007年に出版された本の中にわずかではあるが、ジャーナリストや労働問題研究家がトヨタの実態を明らかにし、批判的に検証したものもある。

11月には、林克明・渡邉正裕『トヨタの闇』（ビジネス社）が出版され、12月には伊藤欽次『トヨタの品格』（洋泉社）、岡清彦『トヨタ　世界一の光と影』（いそっぷ社）、週刊金曜日編『続トヨタの正体』（金曜日）の順に出版された。

トヨタは膨大な広告料を使いマスコミを支配しているが、これらの著書はそうしたマスコミが描くことができないトヨタの実態を明らかにしている。取り扱っている題材に共通するものはあるが、トヨタが称賛され「トヨタの良いところ」だけが流され続ける中で、トヨタの実態に迫り、それぞれの著書がその事実を伝えることの意味は大きい。

ここでは、昨年末に出版されたこの4冊を筆者なりに紹介したい。

林克明・渡邉正裕『トヨタの闇』（ビジネス社）

「レクサス・クラウンの高級イメージと、４畳半・築40年超のボロい寮にすむ正社員。

人を大事に育てるというイメージと、勤務中に過労死しても労災認定すらされない正社員。

性能が良いというイメージと、実は販売台数よりリコール台数の方が多いという事実。

生産台数世界一というブランドイメージと、海外での容赦なき解雇や多発する抗議デモ」（３ページ）。

「本書は、その二面性を持つトヨタの、普段は一般人の眼に触れないほうの部分にフォーカスをあてたものだ」（４ページ）。

本書の内容に即してみると、その中心的なものは過労死、下請けのいじめ、リコール車の増大、フィリピントヨタの解雇といったところである。

しかしながら、本書はトヨタの一面を告発するだけではなく、過労死裁判を闘った内野博子さんや全トヨタ労働組合の若月忠夫さん、トヨタとデンソーを相手にしたパワーハラスメント裁判を起こした北沢俊之さん（仮名）、偽装請負を告発した矢部浩史さんをはじめとした闘う人々をも描いている。そして、著者は、こうした闘う人たちを、トヨタに対して危険を知らせる重要な役割を担っているとする。

著者は、「たとえば、路上にバナナの皮が落ちていたとしよう。うっかりすべって転び、頭でも打ったら大ケガをしかねない。だが、『危ないよう』という声を無視し、バナナの皮に向かって歩いているのが、いまのトヨタ自動車ではないのか」（251ページ）とし、闘う人たちはトヨタに対して、「バナナの皮＝危険」に目を向けさせるとしている。

さらに著者は、「若月さんの言葉を借りれば『トヨタが変われば日本が変わる』。だからこそ、声を上げ

https://rodosoken.com/

始めた人々の役割は貴重なのだ」(254ページ) と、闘う人たちの意義を指摘する。こうした捉え方は重要である。世界企業トヨタを変えることができる。「闇」だけにとどまらず、この点の取材を期待したい。

伊藤欽次『トヨタの品格』(洋泉社)

「品格」が書名に入った著書が出版されているが、本書はトヨタの「品格」を、「トヨタグループ企業、系列下請け、またその下請けなどで働く社員＝労働者の目線」(234ページ) でみたものである。したがって、本書はトヨタや下請け企業などでの労働実態やトヨタ内部で展開されている問題などを明らかにしている。

また、著者は2005年に『あなたの知らないトヨタ』(学習の友社) を出版しているが、本書はこれに続くものである。著者によると、本書と『あなたの知らないトヨタ』の違う点は、「社会問題として大きく取り上げられるようになった偽装請負、派遣労働者、トヨタの繁栄の大きな力となっている外国人労働者の実態をできるだけ明らかにしたこと」(235ページ) とされているが、他の３冊と比較して、その点は詳しく取り上げられている。

下請け企業でのベトナム研修生・実習生が起こした賃金未払い裁判や、ブラジル人労働者の事故死などを取り上げ、安価な労働力として外国人が利用されている実態がわかるであろう。

トヨタの下請けで働くベトナム人研修生と実習生の実態は、逃亡させないためにパスポートを取り上げ、低賃金、強制貯金、さらには作業中、トイレに行くと1分当たり15分の罰金を賃金から控除するという、まさしく現代版「女工哀史」であろう。

本書は、トヨタの政治活動を明らかにしている点も、特徴的である。

2005年の総選挙で、トヨタは自民党候補者の当選のために中部財界の幹部も驚くような支援活動を展開したが、それらをはじめとするトヨタの政治活動が明らかにされている。

ところで、筆者がこの著書でおもしろく感じたのは、「トヨタの品格を表す明言」が各章に記載されて点である。例えば、第１章では渡辺社長の発言がある。

「われわれは業績を上げ立派に成長しているじゃないかと思った瞬間、衰退が始まります。傲慢さは会社をほろぼす、われわれの最大の敵なのです」。

こうした発言と、本書が明らかにするトヨタの姿は違う。トヨタはやはり先の「バナナの皮」に気がついていないのであろうか。

岡清彦『トヨタ　世界一の光と影』(いそっぷ社)

著者は、1989年からトヨタの取材を始めたという。本書は、この19年間に及ぶ取材の中からトヨタの「光と影の部分」(３ページ) を描くことを目的としている。そして、本書の特徴は、過労死（自殺）裁判について多くを割き、詳しく過労死や自殺に至るまでの労働実態を描いていることである。

取り上げている過労死裁判は、トヨタの堤工場で働いていた内野健一さん (死亡当時30歳)、東京トヨタで自動車を販売していた金谷一巳さん（同57歳)、トヨタのテクニカルセンターで働いていた中村隆夫さん（仮名、自殺時35歳）である。工場、営業、設計の現場での過労死である。

内野さんの過労死裁判については、『トヨタの闇』や『トヨタの品格』でも取り上げられている。しかしながら、この著書はそれらより詳しく取材をし、裁判の実態などを明らかにしている。特に、2007年５月25日に行われた名古屋地方裁判所での証人尋問の記録は興味深い。この日は、トヨタ側の証人として内野健一さんの上司が出廷しており、裁判長はこの上司に対して尋問している。そのやりとりを著者は記録し、本書に掲載している。内野さんの過労死裁判は、2007年11月30日に内野さんの勝利判決が出され、その後、国が上告しないため内野さんの勝利が確定した。この勝利は健一さんの妻、内野博子さんをはじめとする運動の成果であるが、本書で明らかにされたトヨタ側の証言では、裁判に負けるものやむを得ないであろう。あまりにも、お粗末である。

週刊金曜日編『続トヨタの正体』(金曜日)

週刊金曜日は2005年に『トヨタの正体』を出版している。内野さんの過労死裁判やトヨタに新しく誕生した全トヨタ労働組合など、労働や生活の面では、『トヨタの正体』で取り上げている。今回の本書は、トヨタの製品（トヨタ車）の安全性という点から、

https://rodosoken.com/

トヨタを明らかにしている。これまでのトヨタを批判的にとりあげる著書が、労働や生活の視点によるものが多くあるが、本書は消費者の視点からのものである。筆者には、自動車の安全に関する知識がないため、本書を読んだ驚きは大きい。

トヨタのリコールは他の3冊も取り上げているが、本書はトヨタの欠陥車による事故の取材を通じて、その恐ろしさとトヨタの無責任な態度を明らかにしている。自動車は、便利な乗り物であり今や生活や産業の活動にとって不可欠なものとなっている。しかし、これは自動車が安全な製品であるという信頼が前提となっている。この信頼関係をゆるがすような事態が明らかにされている。修理されていないトヨタのリコール車が、目の前を走っていると思うと、さらに何時自分に向かってくるかもしれないと思うと、本当に恐ろしい。自動車ユーザーユニオンの松田文雄さんの「日本も米国のようにメーカーへの立ち入り検査権をもつ交通安全庁を独立されるしかない」という発言を紹介しているが、まさにそのとおりである。

トヨタは環境にやさしいかのイメージを広めてきた。本書は、トヨタの「エコ詐欺師」の実態やハイブリッド車の環境負荷が相対的なものにしかすぎず、根本的な燃費改善策はコンパクト車であることを指摘しているが、あらためて作られたイメージでトヨタやトヨタ車をみていたことに気づかされる。

本当の世界一

内野博子さんは、過労死裁判での勝訴の記者会見でトヨタは「生産台数だけでなく、従業員にとっても世界一の会社になってほしい」(『日本経済新聞』、2007年12月1日)と語っている。人の命を奪うような悲しいことを繰り返すことなく、こうした遺族の願いに応えるためにも、トヨタはさらに深く研究されなければならない。そのためにも多くの人々が、トヨタに関心を抱く必要がある。

ここで取り上げた著書は、トヨタの批判にとどまらずトヨタに対する関心を広め、トヨタ研究を深める契機となるという点でも社会的な意義がある。大学の講義でトヨタの過労死事件やベトナム人研修生の問題の話をしたら、学生たちは驚き、そこからトヨタに関心をもったという学生もいたが、著書はそうした役割を果たすであろう。

すでに紹介したが、全トヨタ労働組合の若月委員長は、「トヨタが変われば日本が変わる」というが、決して誇張ではない。経済だけでなく政治にもトヨタは深く関与し、影響をあたえている。日本を変えるためにも、トヨタ研究の意義はある。

なお、紙幅の関係で取り上げることができなかったが、学術的なトヨタの研究書として、猿田正機『トヨタウェイと人的資源管理・労使関係』税務経理協会、2007年がある。現在のトヨタの問題やトヨタを研究する意義などが明らかにされている。一読をすすめたい。

(すぎやま　なおし・会員・中京大学)